

## 分科会D 中世の色と音

### 討議のまとめ 一色と音の比較文化をめぐってー

三浦 徹

本分科会は、比較の手法によって、日本中世社会を見直すという試みであり、大学院比較社会文化学講座が主体となって企画したものである。報告内容が、中世の西欧と中東を対象としていることから、「国際日本学」と銘打ったシンポジウムのなかで、やや異色にみえるかもしれないが、日本学の領域を広げるという意図をもっている。

中世社会の比較という作業自体は、なんら新しいテーマではないが、これまでその多くは、歴史学の分野で、西欧中世との比較が主となり、武士と騎士、荘園と領主制、都市の自治などのテーマが採り上げられた。

ここでは、「色」と「音」という、柔らかいトピックをとりあげた。印刷という複製技術をもたない中世社会では、音と色は、多くの人々に瞬時に情報を伝達するマス・コミュニケーションの手段であり、想像力をかき立てるものであった。中世のヨーロッパでは、都市でも村でも、市や教会の鐘が時を告げ、法的な拘束力をもっていた。日本では、徳政などの一揆のときに、民衆によって鐘が打ちならされた。他方、イスラム世界の都市では、礼拝の時を告げるアザーンやコーランが響きわたり、路上で詩や物語が朗唱され、肉声が威力をもっていた。色に関しては、イスラム教徒の旗印といわれる緑色は、西欧中世では、生命や愛をひいては淫乱を意味し、蔑まれたという。

報告は、服飾、音楽、文学の分野から問題提起をおこない、日本中世史（文教育学部比較歴史学コース、安田次郎）のコメントを得たうえで、議論を進める形をとった。

徳井報告は、西欧中世の叙述資料と画像資料の両面から、黄色と緑が喜怒哀楽や徳目などのシンボリズムをもっていたことを示した。コメントでは、日本や中国では、儀式や身分によって服制が定められていたことが指摘されたが、西欧では、そのような儀礼によって色が定められることは少なく、精神世界の産物であるようである。また、日本では、社会の身分と色との結びつきがあり、僧は通常は「白衣」を、遁世すると「黒衣」をまとい、柿色は「非人」の色とされた。報告では、子供と道化という特殊な役割と色が結びついていることが指摘されたが、社会階層に関してはどうなのであろうか。

永原報告は、グレゴリオ聖歌の朗唱をまじえ、音色で聴衆をひきこんだ。聖歌ときくと、つい定型的なイメージをもってしまうが、定型が記憶され共有されるからこそ、装飾が付加されたりヴァリエーションがつくり出されるのであり、音のもつ記憶性と可変性の双方が語られた。安田氏は、中世の声明と比べ、古い楽譜が残されていることに驚かされたとコメントしたが、永原氏によれば、楽譜という形で記録されるようになったのは、中世後期のことであるという。

杉田報告は、中東の文化において、姿なき声、声なき声が、神秘的存在と意識されていたことを豊富な資料によって示しながら、このような「沈黙の声」が、中国や日本の古典にも見られることを指摘し、比較文学の観点から興味深い話題を提供した。安田氏は、日本では、人間以外の物が声をだし

て語り出すこと自体はそれほど不思議な現象として意識されてはいなかった、音を声にききなすということは、いわゆる擬人化と違う意味をもつのかと問うた。中東世界で、声であることに神秘的な意味が付与されるのは、神のメッセージを声として受け取ってきた一神教の伝統と関連するのかもしれない。司会者は、姿なき声という現象が、中東にも東アジアにも見られるのはなぜか、そこには、共通の理由があるかと考えるのかと尋ねたが、杉田氏は、同じ現象があるとしても、その理由自体は、文化によってそれぞれ別の理由・コンテクストがありうる、という見解を示された。

いずれの報告も、具体的な事例から色や音と人間との深い関わりを提起したが、掘り下げた討議の時間がなかったことが悔やまれる。あえて司会者の素朴な印象を記せば、色に関しては、西欧では精神的なシンボリズムが、東アジアでは社会的なシンボリズムが勝っているようにみえた。音については、聖歌は宗教音楽でありながら、むしろ人間が技術化した音とすれば、杉田氏の「沈黙の声」は、自然が発する音を神秘的な声として捉える世界を描いている。このような対照性が、文化のある一面を表しているのかどうか、今後掘り下げていくことができればと思う。